

第一章

「すごい、ほんとに写真通りの家だ……」

スマホを片手に、目の前の建物を見上げる。

高級住宅地のど真ん中に建つ、こじんまりとした一軒家。

三角屋根で白を基調としたシャビーな外装は、まるで海外のお家みたいで、可愛い。

（シェアハウスは初めてだけど、こんな素敵なお家に住めるなんて……）

しかも、まかないを作れば家賃は無料という好条件。

いろんな人が住んでいるのだから、人付き合いが大変かもしれない。

でもそこはなんとか乗り越えたい。

元気に挨拶をして手土産を渡せば、きっとなんとかなるはず。

「……よしっ！」

深呼吸をし、ゆっくりとチャイムを押す。

するとすぐにドアが開き、中から背の高い男の人が現れた。

（わ、すごく綺麗な人……！）

さらさらの銀髪に、アメジストみたいにきらきら輝く紫色の瞳。

透けるように真っ白な肌。人形みたいに整ったスタイルと、美し

ぎる顔立ち。

光沢のある紫のシャツが、とてもよく似合っていて。

まるで漫画から抜け出てきたみたいだ。

（こんな人が世の中にいるなんて……）

外国の人だろうか？ それにしても銀髪だなんて珍しい。もしかしたら染めてるのかもしれない。

「えーと……どちらさん？」

ポリポリと頭をかきながら、男の人が眠たげな目で私を見下ろす。

「あっ……！ 申し遅れました。私、今日からここに入居する葉桜莉子【はざくらりこ】と申します。どうぞよろしくお願いします！」

「ああ……そういや今日からだったっけ。俺はカイ。よろしく」

「あのっ、これつまらないものですが、ご挨拶代わりに……」

お土産が入った紙袋を手渡そうとすると、いきなり手首を掴まれてぐっと引き寄せられた。

「え？ あ、あの……？」

首筋に顔をうずめられ、カイさんにくんくんと匂いを嗅がれる。

「うーん……経験人数は少なそうだなあ……」

「ちょ、ちよつと、何してるんですか!？」

「何って、査定だけど」

「査定……？」

何のことだろう？ 入居審査なら、もう終わっているはずだけど。
というか、こんな入居審査があるわけないし。

「まあいいや、とりあえず味見させて」

「味見って……んううう………!!？」

ぐつと顎を持ち上げられて、いきなり唇に吸い付かれる。

（なななな……っ！ 何これ……っ!?)

ちゅうううう♡

思いきり舌をしゃぶられ、口の中から唾液を強引に絞り出される。

キスというより、まるでストローで口の中を吸われているみたいだ。

「ん……あまつ」

存分に口内の唾液を啜りあげた後、カイさんが唇を離す。

「……………ッ！　……………ッ！！」

シヨックのあまり声が出ず、パクパクと唇だけが音もなく開閉する。

「すご、顔真っ赤」

カイさんが私を見て、ニヤニヤと笑う。

ようやく喉のつかえが取れて、裏返った声が口から飛び出す。

「なっ……何するんですか！」

「何って、さっき言ったじゃん。味見だよ」

「だから、何の!?」

「え、大河から何も聞いてないの？　ここに住む条件、話したはずな

んだけど」

カイさんが眉間に皺を寄せて、小首を傾げる。

「まかないを作るなら、家賃をタダにしていただけという契約ですが」

「あゝ……クソっ、あいつ適当なこと言いやがって」

カイさんが額を押さえて大きなため息をつき、頭をワシャワシャとかきむしった。

「あの、私何か間違えてたでしょうか？」

「えーっと……なんつったらいのか……とにかく食事っていうのは、あんたが考えているものとは全然違うから」

「????????」

頭にハテナマークが乱舞する。

食事って言ったらご飯のことしかないと思うんだけど。他に何を指すんだろう？

「まずはじめに説明すると、俺は人間じゃなくて、淫魔」
カイさんが自分を指さしてぶっきらぼうに言い放つ。

「……い、いん……？」

耳慣れない言葉に、思考が停止する。

「……そこから説明かよ。あいつまじでブツ殺す……」

ブツブツ言いながら、カイさんがスマホを取り出して画面を見せる。
そこには、頭にツノ、お尻に黒い尻尾を生やした半裸の男性が、女の子とエッチしている漫画のワンシーンが映し出されていた。

「……ッ!？」

「俺は、こーゆー生き物なわけ。人間の女の体液が栄養源で、粘膜接

触で摂取する」

「……つまり……？」

じわり、と背中に脂汗が滲む。できれば、その言葉だけは聞きたくないと思いながら。

けれどその切なる願いは、すぐに打ち碎かれる。

カイさんは私に顔を近づけ、とびきり妖艶な笑みを浮かべた。

「——あんたは、俺と毎日セックスしないといけないってコト」

（ひえ……っ！）

——話は一月ほど前に遡る。

「うーん……ご希望に添えそうな物件は、今のところありませんねえ

……」

駅前にある、小さな不動産屋。

担当の男性がノートパソコンから顔を上げ、曖昧な笑みを浮かべた。

「そうですか……」

カウンターの椅子に腰掛けたまま、背中を丸めて手元を見つめる。

遠回しに『お断り』されているであろうことは、彼の態度からも明らかだ。

（ここで十軒目なんだけど……またダメそうだな）

仕方がない。あのアパートが破格の条件だったのは分かっていたし。

家賃が高騰している今、同じ条件で物件を探すのは初めから無理があつたのだろう。

（それにしても……立ち退きとリストラが同時に来るって、呪われす

ぎでしょ……）」

アルバイトをしていた喫茶店が、経営難で閉店することを告げられた翌日。

住んでいるアパートの取り壊しが決まり、急遽引っ越さなくてはいけなくなった。

築五十年に手が届きそうな古いアパートだったけれど、相場よりかなり安い家賃で住ませてもらっていた。

駅から近くて陽当たりも良く、一人暮らしには十分すぎるくらいの広さの部屋で気に入っていたのに……

「無職というのがやはり、ねえ……せめて親御さんが保証人になってくれたら、もうちょっと選択肢が広がるんですけど。そのご予算では保証会社使うのも難しいでしょう？」

メガネをクイ、と持ち上げて担当の男性がご機嫌を伺うように言う。
身寄りのない私には、身元保証人になってくれる人は誰もいない。
勤めていた喫茶店の店長に何とか頼んでみようかと考えていると、

「お客さ〜ん、シェアハウスに住むというのは、いかがですか？」

担当の男性の後ろから、やけにキラキラしたオーラをまとった茶髪の男性が、ニュッと姿を現した。

「しゃ、社長!?　なんでこんなところに……!?」

担当の男性がぎょつとして後ずさる。

「や、たまたまこっちに用事があったから寄ったんだけど。あ、それよりお客さん、超ラッキーですよ。今ちよ〜ど！　物件に空きが出たところで。すぐに入居してくれる人を探してたんですよ。あ、申し遅れましたが私こういう者です〜」

社長と呼ばれた男性が、私に名刺を差し出した。

そこには『タイガ不動産代表取締役社長 遥月大河【はるつきたいが】』と書かれている。

なるほど、本当に社長さんだったようだ。

遥月さんはピッカピカに輝く笑顔で、私へスマホを差し出した。

そこには、可愛らしい三角屋根の建物の写真が映し出されている。

「こちらの物件なんですけど、私の友人が運営するシェアハウスになっております。なんと住人の食事を作ってくれるなら家賃と契約にかかる諸経費すべて無料！ 生活に必要なものはすべて揃っておりますので、身一つでの入居が可能です！」

「や、家賃無料……！」

なんて素晴らしい響きなんだろう。無職で貯金も心もない私には、

まさしく天の助けた。

「で、でも私……保証人になってくれる人もいないんですけど……」

「ご安心ください。この物件は保証人不要となっております！　さらに今ならキャンペーンでお引越し費用もすべてこちら持ち！」

「！」

ゴクリと喉が鳴る。ものすごく魅力的な物件だけど——都合がよすぎる気がする。

でも、住人全員のご飯を作るって結構な重労働だろうし、それと引き換えに家賃無料というのは現実的な落としどころとして悪くない。

シェアハウスなら短期契約だから出るのも簡単だろうし、次の物件が見つかるまでお世話になるのはアリかも。

「もっ、申し込みって……今出来ますか？」

前のめりで尋ねると、待ってましたとばかりに遙月さんがどこからともなくボールペンと申込用紙を私の前に差し出す。

「もちろんです。この用紙にご記入いただければ、すぐに審査をいたしますので」

かくして私はこの場で申し込みを済ませ、めでたく契約成立と相成った。

——のだけれど。

まさかこんなとんでもない条件だったとは。

道理で話が上手すぎると思っていた。

（どうしよう……でも、もう引越しちゃったし……）

いくらなんでも初対面の男の人とエッチをするなんて、私には無理だ。

カイさんは相当なイケメンだと思うけれど、それとこれとは別問題だし。

（……やっぱり無理だよ。遥月さんに連絡してお断りしよう）
「……………うっ……………」

突然カイさんが壁に寄りかかり、ぎゅっと自分のシャツの胸元を鷺掴みにした。

「ど、どうしたんですか？」

「身体が辛くて……実はこの一週間くらい、何も食べてないんだ……」

「ええっ!？」

カイさんは額を押さえて、弱々しく呻いた。

「俺、人間の食事じゃ栄養は取れないし……参ったな。このままだと衰弱して死んじゃうかも……ああ……女の子の新鮮なラブジュースが飲みたいなあ……」

ガクッ、とカイさんが崩れ落ちる。慌てて駆け寄り、彼の肩を抱き寄せる。

「しっ……死んじゃダメです！ しっかりしてください！」

「うう……死にたくない……なあ……あんたの愛液……飲ませてくれる……？」

半開きになったカイさんの唇から、苦しげな吐息が漏れる。

壁に手について身体をどうにか支えている状態で、座っているのも辛そうな状態だ。

このままだと本当に、こと切れてしまうかもしれない。

さすがに死にかけている人を見捨てるわけにはいかない。

なんとか助けなきゃ……！

「わ……私ので良ければ……さっきみたいに吸ってください……
！」

そう言った途端、カイさんが目を輝かせてガバッと起き上がった。

「ホントに？ 助かるな〜！」

（めっちゃくちゃ元気そうなんですけど!?）

騙された、と気づいた時にはもう遅い。

私の背中は壁に押し付けられ、カイさんの整いすぎた顔が眼前に迫ってきた。

「ん……っ♡ふう……っ……♡」

くちゅ……♡ちゅぷ……♡ちゅぷ……♡

舌が歯列を割り、口内をねろりと舐め回す。

（なんかさつきより、キスがねちっこい気がする……!）

まるで私の口内を味わうように歯と唇の間に肉厚の舌先を差し入れ、そのまま何度も往復させる。

かと思うと、頬裏をちゅんちゅん、と突いたり、舌の付け根を撫でたり。

口蓋の突起をちろちろとなぞられると、まるで愛撫をされているみたいな感覚に囚われて、なんだか口の中がむずむずしてくる。

「っは……♡ホント甘ったるくて……ガキっぽい味……。でも……うつま……♡」

じゅるるるるるるるるる♡

根元から舌に強く吸い付かれる。

（なんだか……カイさんに食べられてるみたいっ……♡）
当然かもしれない。

淫魔のカイさんにとっては、まさしくこれが食事なのだから。

でも……やけに私の中の柔らかいところを突いてくるようなキスで。
官能をかきたてられてしまう。

（どうしょ……気持ちいい……♡）

こんなキスをされたのは初めてで、うっとり身を任せてしまう。

このまま唇を吸われ続けていたら、身も心もとろとろに蕩けてしま

いそう……♡

「ぷあ……っ♡」

長い長いキスのあと、ようやく唇が離れた。

「っ……はぁ……♡あ……ちよつと落ち着いた……ごちそーさん」

カイさんはぺろつと上唇を舐めて、満足げな笑みを浮かべる。

そこでようやく我に返った。

「……っ……だ、騙すなんてひどいです……！」

「や、ほんとに引つかかるとは思わなかったし……あんたチョロすぎ。さすがに心配になるわ」

真顔で言われるとグサグサくるからやめてほしい。心当たりがありすぎる。

でも、キスで終わるならまだ傷も浅い。今のうちにさっさと退散しよう。

「……こ、これで元気になりました、よね？ それじゃあ私はこれで……」

やんわりカイさんを押し戻し、離れようとする、

「あゝ待て待て。まだ終わってないって」

「ふえ!？」

背中をぐい、と押されてカイさんの腕の中に抱き込まれてしまう。

「なななな、なにをっ……」

「あんたこそ約束が違うだろ。俺は愛液飲ませろつつったの」

さす……♡さす……♡

吟味するみたいに、スカートの上からそけい部を撫でられる。

指遣いがやけに淫らで、これからされることを想像して身が竦んでしまった。

「……っ……うう……」

ぎゅうつと目を瞑って、力を込めてふとももを擦り合わせる。

愛液を飲むということは、おまんこを舐められてしまうのだろうか。
（彼氏ともしたことないのに……初対面の男の人となんて、無理だよ
……！）

「そんなに怖がらないでよ。俺がイジめてるみたいじゃん」

「だ……だってっ……さっき会ったばかりの人と……こんなこと……
っ」

うつむいて口ごもると、カイさんが困ったように口元に手を当てた。
「ん……優しくするからさあ。それに、俺ホントに困ってるんだっ
て。だから人助け……っっか淫魔助けと思って……頼むよ」

「うう………ッ………」

身を屈めて、優しく手を握られる。

透き通るような紫色の瞳には、時折弱々しい光が揺らめいているの

が見て取れる。

冗談めかしているけれど、もしかしたら本当に……栄養失調で辛いかもしれない。

初対面の男の人におまんこを舐められるなんて、恥ずかしいし少し怖い。

でも、これはカイさんにとっては死活問題なのだ。

（だったらやっぱり……力になりたい……！）

「わ……分かりました……す、少しだけ、なら……」

「ありがと♡莉子、やさしく♡じゃあ、失礼して……つと」

「え……あっ……♡」

手首をまとめて片手で掴まれ、頭上に持ち上げられる。

空いた手でカットソーをめくり上げられ、乱暴にブラを引きずり下

ろされた。

「ひゃあ……っ!？」

「わ、おっぱいがかっ。ブラのサイズ合ってなくない？」

「お、大きなお世話です……っ。や、ああ……っ♡」

たぶん♡と下から乳房を持ち上げられ、手のひらの上で軽く揺すられる。

「やわらかう。いいね、筋肉少なめの霜降りおっぱい、俺は好き」

さす♡さす♡と乳房のラインを優しくさすられて、胸の内側が火照ってくる。

むずむずして、なんだか落ち着かない。

「な、なんで胸っ……触るんですかっ……!　　しょ、食事とは関係ないですよね!？」

「あるんだな、それが。あんたが感じれば感じるほど、分泌される愛液は濃厚でコクが増す。これはおいしいーラブジュースを頂くための【仕込み】なんだよ」

人を焼き鳥みたいに言わないで欲しい。

いや、彼にとっては私は【食料】なのだから焼き鳥と大して変わらないのか。

（うう……でも恥ずかしいよお……）

もっと機械的に触ってくれたら、耐えられるのに。

肌に置かれる指先はやけに優しく、いたわるようで。心地よさに頭の芯がぼうつとしてくる。

——ぴんっ♡

「ひんっ……♡」

突如、乳房の先端に甘い衝撃が走った。

ぴんっ♡ぴんっ♡

カールした舌先が、リズムカルに乳首の根元を弾く。

「や……あっ♡ちっ、ちくびっ♡ぴんぴんっ♡しないでえ……♡」

「へっ莉子ってやっぱ乳首弱いんだ？　そういう顔してるもんな」

「どういう顔ですか……っ♡はうんっ♡」

「ん？　ドスケベマゾメス顔かな？」

「変な呼び方やめてくださ……あ………ッ♡」

ぢゅうううううう……♡

今度は乳房に強く吸い付かれた。

乳輪ごと口に含まれて、口内でぐにぐに♡と舌で舐めしゃぶられて
ぐちゅぐちゅ♡揉みしだかれる。

どんどん胸の内側が熱くなって、じんじん♡と痺れてくる。

強引に快感を引きずり出されているみたい……♡

「うわゝ腰めっちゃヘコってる。乳首吸っただけなのにエロすぎゝ」

「だって……っ♡こんなことされたらあ……♡♡」

「もう、まんこもぐちよぬれなんじゃない？」

カイさんの手が、スカートの中へ潜り込んでくる。

慌てて腰を引こうとすると「逃げんなって」と掴まれてしまった。

く……♡♡

「ひ……んっ♡」

ショーツ越しに、淫裂を指で撫でられる。

たったそれだけなのに、お尻のくぼみから背中へぞわぞわしたものが這い上ってくる。

「やっぱり。漏らしたみたいにぐっちょぐちょ。莉子って見かけによらずやらしいんだね」

「だって……っ♡あんなことされたから……っ♡」

「さっきまで怖がってたくせに。乳首舐められるの、気持ち良かった？」

「……う……っ」

「ね……どうだった？ちゃんと俺に教えて？」

カイさんの唇が耳元に寄せられ、熱い吐息が耳たぶにかかる。低く湿った囁きが。鼓膜をふるりと震わせて。

導かれるように、頷いてしまった。

「……きもち……良かった……です……♡」

「ん、ちゃんと答えられていい子。こっちもちゃーんと、気持ち良く

してやるから、な？」

するり……♡

ショーツに手がかけられ、太ももを滑るように引き降ろされる。

カイさんがしゃがみこみ、剥き出しになった私の股間へ顔を埋めた。

「かわいいまんこ……♡ちっちゃくてぴっちり閉じてて……こんな処女みたいなまんこなのに、舐めて欲しそうにひくひく♡してやらしく♡」

「………ッ♡」

ふう♡と淫裂に息を吹きかけられて、ぶるつと腰が震える。

焦らされているのだろうか。

さっきからずーっと気持ち良くて、なのに深い快感へ達することを許してもらえなくて。

食事というにはあまりにも淫らすぎて、正気を保てなくなりそうだ。

「も……うっ……♡早く……っ♡吸って……くさいっ……♡」

「えゝ？ 自分からおねだりするなんて、積極的じゃん」

「違いますっ……♡だってこれっ……♡食事、なんですよねっ……♡
もう……ぬ、濡れてるんだし……っ♡すぐに舐めたら……いいじゃないですかっ……♡」

「そうなんだけどねゝ。莉子が可愛いから、もーちよっといじめたくなっちゃって」

れろんっ♡

皮に埋もれているクリトリスを、尖らせた舌先で掘り起こされる。

「ひ……うっ……♡」

淫裂から溢れる蜜を舌で舐め取りながら、ぞろろろろ♡とクリの

付け根へと這い上がってくる。

ぬ……りゅ♡れろ……♡れろ……♡

まるでフェラチオをするように、舌をべったりと肉芽の裏筋へくっつけて舐め上げられる。

かくん♡かくん♡と浅ましく腰が揺れて、まるで自分から舌にクリを擦りつけて扱っているみたい……♡

「自分からおまんこ差し出してんじゃん。そんなに俺に俺に舐めてほしいわけ？」

「ちが……いますっ……♡身体が、勝手にい……♡」

「それってさ……本能が求めてるってことじゃん。莉子って根っからのドスケベなんだな」

「いやああ……♡違う……♡違いますう……♡っ♡」

「違うなら、なんでこんなクリでつかくしてんの？ 食べちゃえそうじゃん」

「い……っ♡う……ううう……♡♡……♡♡」

ちゅくっ……くちゅ♡くちゅ♡

ぷっくりと膨らんだ肉粒を食まれ、口の中で揉みくちやにされる。

ちゅ♡ちゅ♡♡と根元から肉豆を吸われて、中から快感を無理やり引き出されてるっ……♡

「っ♡はっ♡はっ♡はぁ……っ♡」

（っ♡♡むりっ♡だめっ♡きもちい♡いくっ♡いくっ♡いく……♡♡……♡♡）

きゅうつ♡とおまんこの中が一瞬強く窄まり——
ぴゅうううつ♡と愛液が小さくしぶく。

唇の周りに飛び散った蜜を、カイさんがぺろりと舐めた。

「ん……やっぱり甘いな……」

どくん♡どくん♡とクリが脈打っているのが分かる。

お腹の底が熱い。何これ、こんなの初めて……！

「莉子、これで終わりだと思ってる？」

「は……え……？」

すっかり事後の気分だった私の顎をつかみ、むにゅつと頬を揉まれる。

「ちがう……んですか？」

「今のは甘イキだし、全然足りない。俺、めっちゃ腹減ってるからさ」。満腹になるにはやっぱり、ガチイキしてもらわないと」

れろ、と首筋を舐められてぞわりと肌が総毛立つ。

カイさんは再びしゃがみこみ、舌先をにゆるん♡と淫裂の中へと潜り込ませた。

「え……？　ちよつとまつ……………あ……………ッ♡」

にゅ……ぶっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐにっ♡ぐにぐにっ♡

肉厚の舌が、お腹の裏をぞりぞり♡と舐め回す。

中でぐねぐねと蠢くそれは、まるで意思を持った別の生き物みたい

に腔襞をかき混ぜる。

(なっ……なにこれっ♡うそっ♡舌でっ♡おまんこっ♡犯されてるっ



腰がぐんっ♡と持ち上がって、勝手にかくかく♡と小刻みに揺れる。

足はみつともなくばかあ♡つとがに股に開いてるし。

まるで自分から舐めて♡と言わんばかりにおまんこをカイさんに差

し出してゐるっ……♡

くにっ……♡

「あ……っ♡」

カイさんの指先が、まだ熱く膨らむ肉粒に触れる。

ぐりゅっ♡♡♡

「………♡お、おほおッ………♡」

指腹で思いきり押し潰されて、ぐにぐにぐにっ♡とそのままこね回される。

横から勃起クリを倒されて、神経が集まった部分をぶち♡ぶち♡と撫で倒されて。

気持ち良すぎてもお頭がばかになりそう……っ♡

ぢゅるうううう♡ぢゅぽ♡ぢゅぽ♡ぢゅぽ♡

「ひ……っ♡ひんっ♡ひんっ♡ひんっ♡」

胎内でうねる舌が小刻みに律動し、まるでおちんぼみたいにあき差される。

軽く曲げられた舌先がぐに♡ぐに♡と膨らんだ肉天井を押し上げて。つーん♡と尿意に似た切迫感が、クリ裏からこみ上げてくる。

「だ……めっ♡カイさんっ……♡やめっ……もおやめて……っ♡出るっ♡おしっこ出ちゃうからっ……♡」

カイさんはちらり、と私を上目遣いで見て、蕩けた顔で目を細める。そしてさらにぐう……♡♡とお腹の裏を舌で持ち上げてきた。

「ひ……っ♡だめだめだめええええ……♡♡出ちゃうっ♡ほんとに出ちゃうから……あ……♡♡」

ぷしゅっ♡♡♡

ぎゅう……っ♡と痛いくらい収縮したお腹の奥が緩んだ瞬間、勢い良く温かな液体が吹き出す。

カイさんは唇を窄ませて、ぢゅうううううう♡と淫唇へ強く吸い付いた。

「あ……あ♡ん……う……♡」

ぢゅううううう♡じゅぷ♡じゅぽ♡じゅぽ♡

一滴も残すまいとするように、舌で膣襞のシワをなぞられ蜜を舐め取られる。

「ひ……うう……ッ♡」

胎内をまさぐられると、きゅん♡きゅん♡とお腹の奥が収縮して、イッたまま降りてくることができなくて。

そのまま何度も達してしまう。

(やあああ……♡イキ過ぎて辛いよお……♡)

にゅるん……♡

何度目かの絶頂の後、ようやくカイさんの舌が引き抜かれた。

とろお……♡と粘液が蜜口から溢れて、太ももを濡らす。

「莉子ってめっちゃ感じやすいな。こんな子、初めて……♡」

カイさんが下腹部に指を這わせ、円を描くように撫で回す。

「ふぁ……っ♡」

その刺激で、またお腹に甘だるい衝撃が落ちて甘く達してしまった。

「お、またイッたんだ？ すげ……いつもセックスでこんな感じて

んの？」

「……っ……♡初めて、ですっ♡」

「でもあんた、処女の匂いしなかったよな？ 経験人数は、ん……

二、三人ってところ？」

「ど、どうして分かるんですか!？」

「や、だいたい匂いで分かるって。つーかもしかして……今までイッたこと、ない？」

こくと頷くと、カイさんは「やっぱりか」とため息をついた。
「だから、処女みたいな甘ったるい匂いだったんだな。今までの男、何してんたんだよ」

「普通に……エッチ、してました。えつと……少しだけ胸とか触って……すぐ入れる、みたいな」

「は……？ つまんねーセックスするなあ！」

カイさんが信じられない、というように目を丸くして叫ぶ。

「あはは……私がつまんない女だから……しょうがないですよ」

「つまんなくなんか、ないだろ」

カイさんが真顔になった。

「つまんない……ですよ。私、マグロだし……胸が大きいだけがとりえで……いつでもえっち出来てお金をほいほい出すから便利なだけで……」

「……それ、相手に言われたのか？」

うなずくと、カイさんの眉間にぎゅつとシワが寄った。

「あのな、それは男がぜんつぶ悪い！」

「……へ……っ？」

「女の子を気持ち良くするのが男の務めだろ。あんたがマグロなのは彼氏がセックス下手だから！それ以上でもそれ以下でもない！」

びしっ！ と人差し指を額につきつけられて、ぽかんとする。

「そう……なんですか？」

「そう！ だからそんなクソ男の言うことなんか信じるな！ そいつは今すぐ千切ってトイレにでも流せ！」

「……ぷっ……トイレって……」

紙くずみたいにびりびりに千切られた元彼がトイレに流される様を想像して、思わず吹き出してしまった。

くすくす笑う私を見て、カイさんの表情が柔らかくなる。

「うん、あんたは笑ってた方が絶対可愛い」

「か、可愛いって……」

さらっと言われて、頬が熱くなる。

さつきから彼に振り回されっぱなしで、情緒がめちゃくちゃになり

そうだ。

「とりあえず、さ。あんたの部屋、二階の一番奥だから。一晩くらいは泊まっていきなよ。あ、うちの中は好きに探検していいから。じや」

カイさんはそう言うのと、リビングへと消えていった。

(……どうしよう)

もうすっかり、ここの住人になることが決まってしまったようだ。でも、せっかくの好意を無碍にするのも申し訳ない。

これからどうするかはまだ決めていないけれど、彼の言う通り一晩泊まるくらいはさせてもらおう。

(とりあえず……部屋の中、見せてもらおうと)

そろそろと階段を上り、二階へと向かった。

ドアを開けて中に入ると、事前に宅配便で送っておいた段ボールが、部屋の隅に積まれていた。

引越す前に家具はほぼ処分したので、この数箱の段ボールが私の全財産だ。

六畳ほどの部屋をぐるりと見回す。

「……可愛い部屋……」

シンプルな水色の壁紙。白で統一されたベッドや本棚。ベッド脇のサイドチェストには、ころんとした丸みを帯びた傘を被ったランプが置かれている。

まるで外国の映画から抜け出てきたように素敵で。

家賃を払わない居候のためにここまでしてくれるものなのかと、戸

惑ってしまふ。

「し、失礼します……」

おそろおそろベッドへ腰掛けてみる。

ほどよくスプリングの効いたマットレスと、ふかふかの布団が身体を優しく受け止めてくれた。

あまりにも気持ち良すぎて、思わず寝転がってしまった。

（あ……お日様の匂い……）

布団はまだほんのりと温かい。もしかしたら私が来る前に干してくれたのだろうか。

ぬくもりに包まれて、こわばっていた全身がほぐれていくのを感じる。

思っていたよりも、疲れていたらしい。

（そういえば、この一か月……ほとんど休んでなかったもんなあ……

）

部屋探しに引越しの準備。加えてバイト先の閉店作業の手伝いでほとんど出ずっぱりだったし。正直泊めてもらえてかなり助かった。

ベッドサイドに置かれた椅子には、綺麗に畳まれた新品のルームウェアが置かれている。

ふわふわもこもこの生地で出来たワンピースは、見るからに着心地が良さそうだ。

（私のために……用意してくれたのかな）

心がほわっと温かくなる。

こんな風に大切に扱ってもらったのは……いつぶりだろうか。

いつも誰かを気遣って、尽くすことばかりだったから。

（あ……なんかすごく……眠くなってきた……）

緊張が解けたせいかな、どっと耐え難い眠気が襲ってくる。

（眠い……今はとにかく……寝たい……）

枕に頭を預けて、目を閉じる。

そのまま泥に引きずり込まれるように、眠りの淵へと落ちていった。

第二章

——翌日。

「……うそ……」

目覚めるとすでに日が高く昇っていた。

どうやらあのまま私は眠ってしまったらしい。

（よっぽど疲れてたんだな……）

せめてメイクを落として、着替えてから寝れば良かったな……と身を起こすと。

「……あれ……？」

なぜか私は、もこもこルームウェアを身につけていた。

寝る前にちらりと見た、椅子の上に綺麗に畳んで置かれていたあの服だ。

「な、なんで……？」

鏡に映った自分の顔を見て、さらに仰天する。

なんと、メイクまで綺麗に落とされていたのだ！

（ど、どどどど、どうということ……!!）

もしかして、ねぼけながら着替えて、メイクまで落としたというのだろうか。

それはそれで怖い。

それはともかくとして――

（……これから、どうしよう）

セックスが家賃代わりだなんて、とんでもない条件だと思ったけれど。

カイさんとのキスや愛撫は、頭がどうにかなりそうなくらい気持ちよくて。

今まで知らなかった世界を開いてくれたように感じる。

『女の子を気持ち良くするのが男の務めだろ。あんたがマグロなのは彼氏がセックス下手だから！それ以上でもそれ以下でもない！』

（あんなこと言ってくれた人、初めて……）

ずっとセックスというのは、痛くて、辛くて。

相手が気持ちよくなるために、こちらが奉仕するものだと思ってい

たから。

私も思う存分気持ちよくなっているんだと、肯定してもらったような気がして。

(……でも、私は【ご飯】……なんだよね)

セックスというのは好きな人とするものだと、私は思っている。

カイさんは素敵な人だけれど……

『食事』だと割り切って彼に抱かれるのは、やっぱり抵抗がある。
(でも、ここを出て行ったところで行くあてもないし……どうしよう)

ぐうううう。

自分のお腹の音で思考を中断される。

そういえば昨日から何も食べていない。

（とりあえず、朝ごはん食べようかな）

ダンボールを開けて、カップスープと食パンを取り出す。

家具はすべて揃っているとのことだったので、トースターや電気ケトルくらいはあるだろう。

私は食料を抱えて、キッチンへと向かった。

「え……うそ……何も……ない……?」

ピカピカのキッチンの前で、私は呆然と立ち尽くしていた。
ないのだ。何も。

一般家庭にあるような家電の類はもちろんのこと、キッチンツールも見当たらない。

あるのはIHコンロと小さな冷蔵庫だけ。

開けてみると、中にはペットボトルの水とサブリらしきものが入っているだけだった。

そういえばシェアハウスと聞いていたけれど、昨日から他の住人の姿は見当たらない。

もしかすると、ここに住んでいたのはカイさんだけなのかもしれない。

だとしたら、キッチンが空っぽなのも納得がいく。

だって、カイさん——淫魔の食事は、人間の女性の体液なのだから。

（パンはともかく、スープはどうしよう……）

途方に暮れていると、背後からぬつと大きな手が現れ、カップスープをつかんだ。

「ひゃっ……!？」

「何これ？ 面白いモン持つてんじゃん。見せて」

振り向くとあずき色のジャージを着込んだカイさんが、カップスープを持ち上げて興味深げに眺めている。

（!? なんでジャージ!?）

「へへお湯で溶かして飲むんだ？ なんかうまそーじゃん」

「………!! び、びっくりさせないでください!」

「え？ あ、ごめん。目に入ったから、つい。返すわ」

カイさんは悪びれない様子で、カップスープを私の腕の中へと押し

込んだ。

「つか、昨日はよく寝てたな。莉子、全然起きてこないから、もしかして死んでるんじゃないかと思って様子見に行っちゃった」

「え……っ、へ、部屋に来てたんですか!？」

「勝手に入って悪いかなと思ったんだけど、心配になっちゃって。ぐっすり寝てたみたいで安心した。でも、着替えくらいはした方がいいぞ。服がシワだらけになっちゃうからな」

「……も、もしかして……カイさんが私を着替えさせてくれたんですか？」

「ん、そうだけど？ ついでにメイク落としシートがあったから、顔も拭いた」

（行き届きすぎて……!）

「も……もしかして裸……見ました……？」

「うん。でも何もしてないから。さすがに寝てる女の子の身体勝手にいじり回すのは、俺のポリシーに反するし」

さらりと言われ、安堵する。

おそらく彼は嘘をついていない。なぜか、そう信じられた。

「ありがとうございます。あの……何かお礼をさせてください」

「じゃあ、セックス」

「それ以外でお願いします！」

「え……莉子とセックスしたいなあ」

カイさんは不満そうに唇を尖らせた。

前言撤回。やっぱりこの人、セックスのことしか考えてないクズだわ。

「わ……っ、私は……好きな人とか、したくないんですっ……!」
「これから好きになればいいじゃん。俺は莉子のこと、けっこー気に入ってるんだけど?」

「昨日会ったばかりの人のことなんて、分かりませんしっ……」

「好きになるのに時間なんか関係ないだろ? ほら……こっち向いて?」

「……っ! ん………ッ♡」

ちゅ……ちゅむっ……♡

頭を後ろから抱え込まれて、唇をちゅううっ♡と甘く食まれる。

口の中を吸い上げられて、あっという間にれろれろ♡と舌先が淫らに絡み合う。

自在に動く舌先で口内をまさぐられると、発情スイッチが押された

みたいにムラムラする。

(……っ♡だめっ♡昨日のキス……思い出して……っ♡えっちな気分になっちゃう……っ♡)

貪るようにぐちゅぐちゅと口内をかき混ぜられ、泡立った唾液を一気に啜られる。

まるでジュースみたいに一気に飲み干した後、ようやく解放された。

「ん……昨日よりコクが増して、俺好みになったかも」

カイさんが満足げに自分の唇をぺろりと舐めた。

「…………ッ！ い、いきなりキスするのやめてください！ せ、

せめて事前に許可を……！」

「メシに今からお前を食べるけどいい？ って聞く？」

けろっとした顔で言われて、ぐうの音も出ない。

甘い言葉を囁いて迫ってきたかと思うと、私のことをご飯扱い。

温度差が激しすぎて風邪を引きそうだ。

（あ……そうだ！ ご飯！）

「すみません！ あの……私も朝ご飯食べたいんですけど。お湯を沸かせるものってありますか？」

「うーん、ウチ、マジでなんもないから今すぐは難しいな。なに、腹減ってるの？」

「はい。昨日から何も食べてないので……」

「そっか、気づけなくて悪い。じゃあさ、外でなんか買う？ 俺、車出せるけど」

カイさんに尋ねられて、一瞬迷ったけれど。

昨日のことを考えたら、今さらかもしれない。

「じゃあ……おねがいしても、いいですか？」
「よっし。そんなら今から出るか。んで、ついでにちよつと手伝ってほしいことがあるんだけど——」

☆ ☆

「な、なんですかこのボロボロの家は……っ！」

カイさんの運転する車に乗り、向かったのは——

都心から二時間ほど離れた、山の中にある一軒家だった。

ちなみに朝ご飯は途中のコンビニに寄っておにぎりとサラダを買ってもらい、車の中で食べた。

『ちよつとそこまで』のノリでここまで連れてこられるとは思ってい

なかったので、ビックリだ。

やけに立て付けが悪い引き戸を開けた向こう側に広がるのは、もはや廃屋と言っても差し支えないくらいに荒れ果てた室内。

「これって……一人でどうにか出来るものなんですか？」

「いやいや、全然マシな方だって、もつとやべー物件たくさん見てきたし。シロアリに土台食われて、傾きかけてる家とかザラだぞ」

「ひええ……」

——カイさんに提案された『手伝ってほしいこと』

それは、彼の作業光景を撮影することだった。

カイさんは格安物件を買い取って自分でリノベーションを行い、そ

れを販売したり賃貸に出したりして生計を立てているのだそう。

遙月さんの勧めで動画を配信してみたところ、『とんでもないイケメンがDIYで家改造してる』と話題になり、今や登録者数十万人の大人気配信者なのだという。

ちなみに、あずきジャージは作業着だったようだ。これが彼のトレードマークらしい。

『淫魔』というファンタジーのような存在であるカイさんが、そんな地道な仕事をしているなんてなんだか不思議な感じだ。

「淫魔って、魔法で家建てたりできるんじゃないですか？」

「莉子は淫魔に夢を抱きすぎ。ご先祖様ならそんなくらい出来たかもしれないけど。残念ながら、今の俺は人間よりちよつとセックスが上手い程度の力しか無い」

「……あの、それならその能力を活かした仕事に就いた方がいいのでは……？」

「まゝそうなんだけどな。俺、接客業苦手なんだよな。誰でもいいってわけじゃないし」

カイさんは髪を手ぐしでまとめて、タオルをきゅつと頭へ巻き付けた。

「だから手に職つけないと、人間界で暮らしていけないってわけ。ちなみに、大河も淫魔だからな？」

「ええ!？」

「またもや頭のとっぺんから抜けるような声をあげてしまった。」

「遙月さん、淫魔だったんですか!？」

「じゃなきゃ、あんたを俺のところに斡旋したりしないっつの」

「淫魔って……もしかして私が知らないだけでたくさんいる……んで
すか？」

「そうかもな？ つーわけで撮影しっかり頼むぞ？」

カイさんがコンデジを私へ放り投げる。

慌ててそれを受け取り、カメラを構える。

ボロボロの建物を背にして立ち、カイさんが爽やかな笑みを浮かべ
た。

「こんにちはー！ カイのわくわくDIYチャンネルでーっす☆」

☆
☆
☆

「……はいっ！ というわけでー本日はここまでっ！ 次回はようや

く室内の改装に入ります。ハイブボタン、高評価、コメントいつもありがとうございます！ チャンネル登録もどうぞよろしくお願いします☆

爽やかな笑みを浮かべるカイさんをファインダーに収め、ストップボタンを押す。

途端に、スッ……と顔から表情が消え、全身がどんよりとしたオーラに包まれた。

「あゝゝやつと終わった……もー汗べつとべとできもちわりゝ」

カイさんは渋い顔をしてブツブツ言いながら、首に巻いたタオルで汗を拭いている。

（落差が激しすぎる……！）

撮影中のカイさんは、まるで人が変わったようにキビキビと動き、

そしてよく喋った。

あとで編集するので大幅にカットすることだったけれど、作業を進めたり、何か小さなトラブルが起こるたびに視聴者が喜びそうならアクションを取ってみせたりとサービスピース精神旺盛で感心してしまった。

そして何より、自分の背丈よりも大きな木材を軽々と扱い、手際よくのこぎりで切って柱を組み立てていくカイさんの姿はとても素敵で。ずっと撮っていたと思うほどだった。

「お疲れ様でした……！」

「ん、莉子もお疲れ。ちよつと動画チェックさせて」

コンデジを手渡すと、カイさんは動画を再生し素早く目で追った。

「おいしい感じじゃん。初めてなのにスゲーよく撮れてる。もしかし

て自分でVlogとかやってんの？」

「いえ。バイト先でSNS用の動画撮ったりしてたので、なんとなくは分かるというか」

「マジか！そりゃ頼もしいわ。これからは莉子に撮ってもらおうかな。前は大河に手伝ってもらってたんだけど、最近あいつ忙しいみたいでさ」

カイさんは『すげー、すげー』と目を輝かせて、動画を見ている。私でも役に立てたんだと思うと、嬉しい。

「バイト代出すからさ、撮影毎回やってくんない？編集も教えるから、覚えてもらえると助かる」

「わ、やってみたいです……！」

答えてしまったから、ハッとする。

一晚泊まって出て行こうなんて思っていたのに、何やってるの私は。でも、定期収入が得られるのはありがたいし、何より撮影が楽しかったのでもっとやってみたい。

「あっ、あのっ！ か、通いでもいいですか……？」

「えー？ もしかして家、出てくの？」

「ま、まだ分からない、ですけど……やっぱり、その……セックスはちょっと……」

「うーん……」とカイさんは顎に手を当てて、天井を睨んだ。

「ほんとは住んでほしいけど、通いでもいいよ。元々撮影スタッフ募集するつもりだったし」

「ありがとうございます。あの……それと」
「ん？」

「さっきは変なこと言って、すみませんでした！」

がばつと頭を下げると、カイさんは不思議そうに首を傾げた。

「変なことって、何？」

「淫魔だから……その……えっちな仕事の方が向いているんじゃないかなんて言っちゃって。作業しているカイさん、すつごくかっこよかったです！」

「え、俺が？ あずきジャージで頭にタオル巻いてんの？ 莉子って変わってんね」

カイさんが怪訝そうな顔をする。

「はいっ！ あんな鮮やかな手つきで柱を組み立てちゃうなんて、匠の技だなんて。カイさんの素敵なところを皆に伝えたいって思ったから、良い動画が撮れたんだと思います」

「……………」

カイさんの顔から、スッ……と笑顔が消えた。

しまった。もしかして前のめりに語りすぎてドン引きしてるんだろうか？

「……………」莉子さあ。そういうこと、誰にでも言ってるわけ？」
ぎゅっ、と眉間に皺を寄せ、カイさんが妙に尖った声で言う。

「へ？」

「ダメだよ、不用意にカッコイイとか言ったらさあ……男なんてちょろいんだから、すぐ惚れられちゃうよ？」

じりじり、とカイさんが距離を詰めてくる。

（な、なんか目が……ピンク色になってる……？ 何これ……！）

「だ、誰にでも言ってるわけじゃないですっ……………！」

「ホントに？」

「本当です！ 心からかつこいになつて思つたので……っ」

「あ、また言つた。ダメだつて言つたのに。無理。俺、莉子のことホントに好きになっちゃう」

「ひゃ……っ♡」

抱きすくめられて、かりっ♡と耳たぶを食まれる。

うなじにぞくっ♡と寒氣じみた痺れが走つた。

「ちよ、ちよつとカイさん!? 落ち着いてください！」

「莉子が悪いんだよ？ 俺、あんなこと初めて言われたんだから。だつせえジャージ着て、汗だくでのこぎりギコギコ言わせてる俺がカッコイイなんてさ。フツー思わないだろ」

熱い吐息まじりに、切なく訴えかけられる。

(な、なんでこんなことに……!?)

鼓膜に落ちる囁きだけで腰砕けになって、動けない。

心臓がバクバク言っただけで爆発しそう……!

お尻には、パンパンに膨らんだ股間を押しつけられていて。

どう考えても、『これからセックスしますよ』って、言われてるよ

うなものなのに……!

「だ……だめですよ……こんなところで……っ♡だ、誰か来たら……

どうするんですかっ……♡」

「大丈夫。誰も来ないから……それに俺、ずーっと働きづめで腹ペコ

なんだけど」

「…………ッ♡」

すり……♡

ブラウス越しに乳房をさすられて、ぴくんと肩が震える。

「このままだと俺……倒れちゃうかも」

「そっ……その手にはもう……♡乗りませんっ……♡」

「ホントなんだってば♡信じてよ。このままじゃ車の運転無理かもだし。家に帰れなくなっちゃうぞ？」

「うう……」

「な？　お願い……♡」

しゅるるる……っ♡

黒光りした尻尾がカイさんのお尻から伸び、ショーツのクロッチ部分を撫でる。

ぬちゃっ……♡

「ひゃううん……♡」

ゴムみたいな感触の尻尾が淫唇へ触れ、びくんっ♡と大きく身体が跳ねた。

「うわ、もう尻尾びっちょびちょ♡おとなしそうな顔して、やらしーなあ」

「だ、だってっ♡こんなこと、されたら……あ……っ♡」
ショーツごと肉溝へ埋もれた尻尾は、ゆっくりと上下へ律動を始めた。

にゅ……る♡ずりゅ……♡ぬりゅ♡ぬりゅ♡

（あ……っ♡おまんこの入り口っ♡擦られてっ……♡やだっ、じんじゅんしてきたあ……♡）

「なーんだ。もうまんこぐちょぐちょじゃん？ 莉子もホントはしたかったんだ？」

「ちが……いますっ……♡だってっ♡尻尾がっ♡おまんこすりすりするからあ……♡」

「イヤだったら、こんなに濡れないじゃん？ もー、尻尾好きならもっとう早くやればよかった」

ぬ……りゅ♡くに♡くに♡

尻尾がくねり、先端がクリトリスをちょんちょん♡とつつく。

硬くて弾力があるそれは、まるでバイブの先端みたいで……

根元から有無を言わさぬ圧をかけられて、クリトリスが押し潰されちゃうっ♡

「ほーら。クリがごめんなさいって土下座してるぞ？ 莉子も素直になつたらどーだ？」

「ひ……んっ♡やっ……♡やだああ……♡クリい♡虐めないでえ♡」

「莉子の『やだ』は『好き』だもんな？俺、ちゃんと分かってるから」

「ふあああ……♡ちがう……♡つてばあ……♡」

「莉子の意地っ張り♡素直になれるように、もつと感じさせてやるよ♡」

[illegible]「ひ
う
…
♡
」

尻尾が器用にシヨーツの中へと潜り込む。

尻尾の先端がぱくつと割れて、剥き出しの肉芽にちゅうう♡と吸い着いてきた。

「ひ……っ♡」

ぢゅー♡

パンパンに膨らんだ淫核の先端を、思いきり吸引される。

更に無数の突起が押し寄せてきて、クリの両脇をこし♡こし♡と擦り始めた。

「きもちうだろ？ これ……♡ナカにイボイボがみっちりついてて、クリぴっかぴかに磨けちゃうんだぜ？」

「い……………♡♡ひぐ……………♡うっ♡う……………♡♡」

気がつくとカイさんの首に自分の腕を回し、ぶら下がるようにして腰をくねらせていた。

「やっぱ……………♡莉子めっちゃ腰へこって、おまんこダンス踊ってる。やうらし♡動画撮りたくなってきちゃった」

「……………♡♡撮る、のは……………だめ……………え……………♡」

「んゝ大丈夫♡撮らないよ♡だからもつと、えっちに喘いで……………？」

「んきゅううう……ッ♡ひっ♡あっ♡ひゃうう♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

にゅくっ♡にゅくっ♡にゅくっ♡

淫唇にめり込んだ尻尾が律動し、ぬかるんだ秘裂をぬちゅ♡ぬちゅ♡思いきり擦り立てる。

真っ赤に腫れ上がって、敏感なところが剥き出しになったクリトリスを、こちゅ♡こちゅ♡とツブツブが容赦なく磨き上げる。

「ほら、乳首も弄ってやるよ。きもちーとこ三点責め、贅沢フルコース♡」

かりっ……♡かりかりかり……っ♡

両方の乳頭を絶え間なくかきむしられて、甘痒い刺激で胸がむずむずしてっ♡

自分からおっぱい差し出して、いやらしく腰へコつかせてるっ♡

(ほんとに……♡これって私の身体なの……?)

元彼たちとのセックスとは違いすぎる。

全然気持ち良くなって、早くイってくれることを願いながら天井ばかり見つめていたのに。

こんな風にどこもかしこも敏感になって、蕩けそうになるくらい感じられるなんて……っ♡

ぞりゅんっ♡ぞりゅん♡ぞりゅんっ♡

ぎゅむううう♡くりゅ♡くりゅ♡びん♡びん♡びんっ♡

ぷっくり腫れ上がった乳首を摘まみ上げられ、指腹で押し潰された
り。

かと思うと、絶え間なく爪で弾かれ続けたり。

下腹部ではビンビンに勃ちきったクリトリスをこしゅこしゅこしゅ
♡と円を描くように蠢いた入り、かと思うとぢゅうう♡と吸い着い
て揉みくちやにされたり。

身体の至る所で快感が膨れあがっては小さく弾けて、甘イキが止ま
らない♡

「っ……お♡ほお……ッ♡ふ……っ♡うっ♡くふっ♡ふーっ♡ふうう
うっ♡」

半開きになった唇から、唾液がたらりと糸を引いて垂れ落ちる。

「あゝっ、こぼれてるっ……勿体ない♡」

ぢゅるうううううう♡

「………ッ♡」

カイさんが身を屈めて顎へ吸いつく。

顎をれろれろ♡と舐められて、反り返った喉を撫でられて、それだけでもゾクゾクしちゃって。

もう全身が性感帯になっちゃったみたい……♡

「莉子、いっぱいイケてえらいな♡やっぱり俺が見込んだ通り、莉子はドスケベマゾメスちゃんだ♡」

「っ……あ……♡カイ……さんが……♡何か……したんじゃないですかっ……♡」

「何かって？」

「だから……っ♡尻尾とか、唾液とかにっ♡えっちになる成分が含まれてる……とかっ……♡」

だって、そうでもないと説明がつかない。

ちよっと触られただけで、イキまくるほど感じてしまうなんて……

っ。

「んゝ……莉子はやっぱり淫魔に夢抱きすぎなんだよなゝ」
くちゅ……♡

たっぷり濡れそぼった淫裂を、指がくぱあと押し拡げる。

「ひゃう……♡」

「残念ながら、俺にそんな力はないよ。だから、莉子がやらしー身体してるだけ」

「そ……そんな……っ……♡」

「でもさっきも言った通り、セックスだけは上手いから。莉子をめいっぱい気持ち良く出来るぞ……♡」

ぬりゅ……♡

指で拡げられた秘裂に、膨らんだ肉傘が押し当てられる。

「や……だめ……♡セ、セックスは……っ♡」

「ほんとに好きな人としかしない……だっけ？　なあ、莉子は俺のこ
と……嫌い？」

「……っ、き、嫌いじゃない……ですけど……♡そういう聞き方、ず
るいですっ……♡」

「じゃあ、どう聞けば挿れさせてくれるの？」

耳元に、低く甘い囁きが落とされる。それだけでもう、身震いして
しまう。

「……っ……う……♡そんなの……分からないっ……♡」

「莉子こそずるいよ。分かんないふりして、自分からおまんこヒクつ
かせて俺のちんぽ誘ってるくせに……♡」

ちゅく……♡ちゅく……♡

肉傘が蜜口を淡く擦る。熱が膣襞に移って、胎内がひくんっ♡とひきつつた。

(ああ……♡だめ……♡插れたいっ♡カイさんのバキバキデカちんぽでっ♡おまんこかき回してほしいっ♡)
彼を好きかどうか、まだ分からない。

でも、身体が求めてしまってる。このおちんぽを食べたいって、身を振って子宮が主張してるっ……♡

「……欲しい、だろ？」

っう♡としなやかな指先が、下腹部を撫でる。

ああ、ダメだ。もう私は――

「……欲しい、です……」

掠れた声で、小さく呟く。

「……もっと、はつきり言って？」

「……欲しい、ですっ……♡カイさんの……ぶっといおちんぽっ……♡おまんこに……挿れてほしいっ……♡」

肩を震わせ、絞り出すように言う。

カイさんは目を細めて、私の頬を撫でた。

「胸まで真っ赤になってる。恥ずかしいの我慢して、よく言えたな♡いい子……♡」

くちゅ……♡

切っ先が、ぴとりと秘裂に宛がわれる。

ぐっ、と背後から腰を突き入れられて――

「っっ♡……おっ……ッ♡」

ぐぶぶぶううううう……♡

ぴったり閉じた膺壁を搔き分け、パンパンに張り詰めた怒張が中へ押し入ってきた。

(っあ♡来てるうううつ♡カイさんのあつつくてぶっといおちんぽがっ♡中っ、みぢみぢって開いてるうううつ♡)

「……っく……♡莉子の中、キツキツ……♡もう、挿れただけでイッちまいそう……♡」

熱い吐息が鼓膜を震わせ、寒氣じみた痺れがうなじへと落ちる。

「は……っ♡ふ……うえ……っ♡」

腰が抜けそうになって、がくんと崩れ落ちそうになる。

「あぶな……っ。ちゃんと支えとかないとダメだな」

カイさんが私の手首を引っ掴み、後ろへ引き寄せた。

「は……っ……♡」

ぬ……ろっ♡ぬぢっ♡ぬぢっ♡ぬぢっ♡

おまんこの入り口を浅く擦られ、じわあ……♡と胎内が熱を孕む。

「ゆっっくり擦られるの、きもちーだろ？ いつもはこんな丁寧にしないんだけど、莉子かわいーからサービスしちゃう」

「……♡いつ……もってっ……♡ほっ、他の人とも……♡こんなこと、してるんですか……？」

「そーだな。でも、もー莉子としかない。俺、決めちゃったし」
ぬりゅ……♡ぬっぢゅ♡ぬっぢゅ♡ぬっぢゅ♡ぬっぢゅ♡

恥骨の辺りを丹念に撫でられて、ぞわぞわした感覚が腰の周りにじわっと広がる。

気持ち良くなることから逃げたいのに、手を引っ掴まれて快感をコントロールされてみたい……♡

「ひ……あ……♡ん……ふうう……んっ♡」

「あゝあ、もうちんぽに負けた顔になっちゃって♡莉子ってばホンッ
トよわよわ雑魚まんこ♡」

「っあ……♡雑魚……なんて……ひどいですっ……♡」

「でも、今まんこきゅっ♡って締まったぞ？ ひどいと言われるの
……好きだろ？」

「っう♡ううう……♡……♡……♡」

（悔しい♡全部バレてる……っ♡）

「なあ、もしかして彼氏にそういう性癖植え付けられた？」

「ちがい……ますっ♡こんなこと、言われたことない……っ♡」

「じゃ、オナニーしながら妄想してたんだ？ やらし……♡」

「やだ……やだあ……♡もうこれ以上言わないでえ……っ♡」

恥ずかしさで顔が熱くなって、涙がぼろぼろこぼれる。

でも、胸の奥までぞくぞく震えて、勝手にお腹の裏側がびくびく波打って。

身体が悦びにわなないているのがイヤでも分かる。

（こんなのっ……♡変態みたいじゃないっ……♡♡）

ずっちゅ♡ずっちゅ♡ずっちゅ♡ずっちゅ♡

Gスポットにねっとり♡肉竿を擦りつけて、張り出したカリでざらついた部分をぞりっ♡ぞりっ♡と挟る。

その度に、きゅん♡きゅん♡と尿意に似た切ない感覚がおへそから突き抜けそうになる。

「うあ♡やめっ♡これやめれっ♡またっ♡なんかっ♡出ちゃうからあ
あっ♡」

「いいじゃん、ハメ潮ぴゅーぴゅー吹きながらイっちゃえば？ 恥ずかしいとこゼーんぶ見てやるから 恥ず

「いや……いやああ……♡」

「イヤイヤ言ってるけど、好きなんだろう？ 昨日会ったばかりの男と外で汗だく立ちバックセックスして、自分からちんぽ欲しい欲しい♡って尻突き出しておねだりしてさあ……♡ 莉子は露出系ドマゾだよな。俺、覚えたから♡」

「ひどい……♡なんでそんなことばかり……♡ 言うんですかあ……♡♡」

「んー♡ごめんな♡だって虐めると莉子、すげーまんこぎゅっぎゅ締まるんだもん。だからもっと俺、莉子を喜ばせたくて」

見透かされてる。酷いことを言われれば言われるほど、興奮するの

全部バレてるっ♡

ずっと隠してたのにつ♡言われたいの我慢してきたのにつ♡

ああでも——もつと——

「虐めてほしい……だろ？」

「ふあ……？」

ぐつ、と膝に手を掛けられ持ち上げられる。

ふわりと身体が浮いて、そのまま――

ず……ツちゅん♡♡♡♡

「~~~~~~~~ッ♡ひ~~~~ッ♡お~~~~ッ♡お
おおお~~~~」

⋮
ツ
!?
└

ずしっ……♡とお腹の底まで重たい衝撃に貫かれた。

(こ)……これええ……♡子宮口♡押し上げられてえ……♡奥まで

おちんぽっ……♡ぶっすり刺さっちゃってるぅ……っ♡

「よし♡ちんぽッ刺したままルームツアーしような♡」

カイさんは私と繋がったまま、ゆっくりと部屋を歩き始めた。

「い……あっ♡んっ♡ひ……ぐう……っ♡」

ぬ……ぢっ♡ぬぢゅ♡ゆさっ♡ゆさっ♡

カイさんが部屋を歩く度に、ずんっ♡ずんっ♡と秘奥を狭く深く挟まれる。

「はい、こっちが台所。つってもまだ何もないんだけど。莉子はさー、どういう配置にしたらいいと思う？」

「わ……がんな……っ♡ひっ♡んう♡」

「えーもう、俺も分かんないから莉子に聞いているのに♡」

「カイさん……わざと♡やってまひゅねえ……っ♡」

「あ、バレた？ イキすぎて口が回らない莉子が可愛くてさ〜ごめんな♡」

子宮口を小刻みに揺らされながら、尻尾の先っぽでクリをちゅうちゅうと吸われてっ♡

おちんぽぐっぽり呑み込んだおまんこを、丸見えにさせられてるの
にっ♡

じんじんお腹の底が熱くてっ♡頭がクラクラしてっ……♡

(すっごい……興奮するっ……♡♡)

「な、莉子。乳首寂しくない？」

「ふえ……？」

「チクニーしてるとこ……俺に見せてほしいんだけど」

「ええ……っ!？」

「まんこもクリも乳首も……ゼーんぶ気持ち良くなっちゃお？　な？」

耳元で囁かれて、ぞわっ♡と背中が総毛立つ。

どうしてだろう。逆らえない。

いや……違う。私が望んでいることを、彼が読み取って口に行っているんだ。

「ふ……う……♡」

おずおずと手を伸ばし、乳房の先端に触れる。

「ん……♡うっ♡はっ♡はひっ♡んっ♡うっ♡」

かり……かりかり……っ♡

カイさんの触り方を思い出して、乳首を軽く引っ掻く。

じんっ♡じんっ♡と断続的に甘痒い刺激が乳頭をかすめて。

ぐう♡と前におっぱいを突き出して、カイさんに見せつけるみたいにチクニーしちゃってるっ……♡

「……俺の触り方、思いだしてるんだ？ うれしー♡ もーっと莉子の奥深くに、俺のコト刻みつけたくなっちゃうな……♡」

カイさんが私におちんぽを挿入したまま、どっかりと床へ腰を降ろす。

「は……へえ……？」

「壊しちゃったら、ごめんな？」

ずろろろ……♡ど……っちゅんっ♡

「ほお……♡……♡……♡」

お腹から頭のとっぺんまで、太い快感の柱に貫かれる。

足首をがっちり掴まれて持ち上げられて、オナホみたいにおまんこ

におちんぽずっぽずっぽブッ刺されてるっ♡

モノみたいに扱われてるのに、頭の芯がどろどろに蕩けそうなくらい気持ち良くて。

意識の淵がヒリヒリするくらい感じちゃってる。

——ああ。

ずっと私はこんな風に……犯してほしかったんだ……♡
誰も踏み込んでくれなかった、私の心の奥の扉を開いて。
秘めた欲望を、解放してほしかったんだ……♡

「はあ……っ♡ 莉子……♡ かわい……♡ 好き……♡ 好き……♡♡」

ちゅ……♡ ちゅむ……♡ ちゅぱ……れろ……ぢゅるううううう……

っ♡

喉奥近くまで舌を差しこまれて、粘膜を直に愛撫される。

息が出来なくて苦しいのにっ♡頭がふわふわしてっ♡トンじゃいそ
うなくらい気持ちいい♡

「んうゝゝ……………ッ♡うっ♡くふうう♡んゝゝ……………ッ♡んうう
うゝゝ……………ッ♡」

「莉子のまんこ…………ぎゅーぎゅー締まって…………♡ヤバっ…………♡っは
…………お礼に俺のザーメン、たっぷりナカに出してあげるね…………♡」

「ナカ…………は…………だめえ…………♡妊娠、しちゃうっ…………♡」

「だいじょーぶ。まだ孕まないよ。今は…………ね…………♡」

「ひいんっ♡あっ♡はっ♡あっ♡あっ♡あああああああゝゝ
……………ッ♡」

どぶっ…………♡

子宮口に圧着する肉竿が大きく跳ねて、熱い精の塊が体内へ注ぎ込

まれる。

「はゝい♡莉子のおまんこ征服完了っ♡はゝゝすっご……莉子の特濃まん汁、ちんぽにビンビン来るわゝ」

カイさんが背後から覆い被さり、私のうなじにちゅっ♡と口づけた。
（どうしよう♡中出し……されちゃったっ♡昨日会ったばかりの人なのにつ♡）

好きな人としかないなんて言っただくせに。

勢いとはいえ、会って二日しか経ってない男の人としちゃうなんて。
（でも……めっちゃくちゃ……気持ち良かった……♡）

身体の内側に溜まっている、重だるい快感の残滓すらも心地良い。

こんなに隅々まで丁寧に愛されて、絶頂するなんて……生まれて初めてだ。

「なあ、莉子。俺とのセックス、どーだった？」

カイさんが私に顔をくつつけて、思いきり頬ずりする。

「……………気持ち、良かったです」

「だろ？　じゃあさ、明日からも一緒にいてくれる？」

「う……………でも……………私は……………」

「好きな人としかしらない……………だっけ？　じゃあ俺のこと、好きになつてよ」

ピンクと紫が混じり合った瞳を細め、カイさんが微笑む。

（……………好きになったら、どうなるの？）

カイさんは淫魔で、私はあくまで【ご飯】代わり。

だからこれは、リップサービス。

彼にとっては【ご飯】を美味しくするためのトッピング程度でしかない。

——でも、それでも。

カイさんと一緒にいたい。

カイさんのことをもっと知りたいって、思い始めてる。

「……条件が、あります」

首を傾けて、彼の方へと視線を向ける。

「え？ なになに？」

「キッチン家電を買って下さい。電子レンジとか、電気ケトルとか。冷蔵庫も、できたら大きい方がいいです」

私がほだされていることが伝わらないように、できるだけ淡々とした口調で伝える。

するとカイさんはニカツと笑って、「了解」と答えた。

「こんなんでいいの？ 莉子ってば謙虚♡じゃあ最新型の上位モデルで揃えちゃおっかな♡」

「明日からよろしくな♡」と口づけられて、ドキッとしてしまった。

（……大丈夫）

私はちゃんとわきまえてる。

セックスが気持ち良かったから。行く当てが見つからないから、留まるだけ。

これはお互い、利害が一致しただけの関係。

だから、好きになんてならない。なっちゃんいけなんだ。

——絶対に。